

その 30

万葉ファンタジア

「防人の歌」(その 2)



対馬

防人の別を悲しふる情を陳べたる歌

「大君の 任^まけのまにまに 島守^{しまもり}に 我が立ち来れば ははそ葉の 母^むの命^{みこと}は み裳^もの裾
摘み上げ搔き撫で ちちの実の 父^{みこと}の命^{たく}は 拷^{しらひげ}づのの 白髭の上ゆ 涙垂り 嘆きのたば
く 鹿子^{かこ}じもの ただ独りして 朝戸^{あさと}出^での 愛^あしき我が子 あらたまの 年の緒長く 相見ず
は 恋^こしくあるべし 今日^{こと}だにも 言^{こと}問^{こと}ひせむと 惜^こしみつつ 悲^こしびませば 若草^{わがくさ}の 妻^めも
子どもも をちこちに さはに囲み居 春鳥^{はるどり}の 声^{こゑ}のさまよひ 白^{しろ}拷^{たへ}の 袖^{そで}泣^なき濡^ぬらし たづさ
はり 別^{わか}れかてにと 引^ひき留^{とど}め 慕^もひしものを 大君^{みこと}の 命^{みこと}畏^{かしこ}み 玉^{たま}梓^{ほこ}の 道^{みち}に出^いで立ち
岡^{おか}の崎^{さき} い廻^{まわ}るごとに 万^{よろづ}たび はろはろに 別^{わか}れし来れば 思^{おも}ふそら 安^{やす}くもあらず 恋^こふ
るそら 苦^{くる}しきものを うつせみの 世^よの人なれば たまきはる 命^{いのち}も知らず 海原^{うなはら}の 畏^{かしこ}き道^{みち}
を 島^{しま}伝^たひ い漕^めぎ渡^{わた}りて あり廻^{まわ}り 我が来るまでに 平^{たい}けく 親^{おや}はいまさね つつみなく
妻^めは待^{まち}たせと 住吉^{すみのえ}の 我が統^とめ神^{かみ}に 幣^{ぬさ}奉^たり 祈^なり申^まして 難波^{なにはつ}津^つに 船^{ふね}を浮^うけ据^すゑ
八^や十^そ楫^か貫^ぬき 水手^{かこ}とどのへて 朝^あ開^ひき 我^{われ}は漕^めぎ出^いぬと 家^{いへ}に告^つげこそ」

大伴家持(巻 20・4408)

(天皇のご任命のままに、防人として家を発つ時、母様は私の裳の裾をつまみ上げ頭を撫でて下さり、父様は白髭の上に涙を垂らし嘆息して言われることには、「ただ独り朝発ちしてゆく愛しい我が子よ、長い年月逢わなければさぞ恋しいことだろう。せめて今日だけでも睦まじく語り合おう」と、名残を惜しんで悲しまれるので、若い妻も幼い子供もあちこちに集まっては身を寄せ合い呻き声をもらし、白い袖を涙で濡らしながら互いに手を取り合い、別れ難いと言っては引き留めて恋しがったけれども、天皇の仰せを畏れ謹み旅路に踏み出し、丘の角を曲がるたびに、何度も何度も振り返り見ては、はるばる別れて来た。家族を慕う心は落ち着かず、恋うる心は苦しいものの、現世の人の身なのだから命を計り知ることは出来ず、「海原のおそろしい潮路を島伝いに任地まで漕ぎ渡り、任務を果たし終えて帰って来るまでは、どうか父母はお変わりなく、妻はつつがなく待っていて下さい」と、住吉の社の神に御幣を奉り、祈りを捧げて、かへり見しつつ難波の湊に船を浮かべ、楫をたくさん取り付け水夫を揃えて、夜明けを待って私は漕ぎ出て行った、と、そう家に告げて下さい)

難波津に集結した防人たちを^{けんぎよ}検校する^{ひょうぶの}兵部少輔^{しょうぶ}大伴家持に、上総国と下総国の部領使が防人の歌を奏上している途中、上野国の部領使が割って入り、「醜の御楯」の歌を声高々と読み上げ、18首の防人の歌を呈上いたしました。

それを見た上総・下総の連合軍も負けてはいられません。つられて、我勝ちに家持に申し立てます。

「兵部少輔どの、下野国の歌よりもっとたくさん、上総の防人の歌が、ここに19首ございます」

「下総の防人の歌は、これ、22首もございます」

「先程は、歌は1首だけとか、1首も用意できぬと申しておったではないか。なぜ、それを早く申さぬ」

「は、は、それは……それは、それとして……私ども上総と下総の防人の歌も、『万世に語り継ぐ歌集』に載せていただけませんか？」

「それはまだ分からぬ」

「む、む……女々しい歌は載せられないのでございますか？」

「いや、そうではない。拙い歌は載せぬ。拙い歌はわしが外して、良き歌だけを載せるのじゃが、東国の歌はなかなか良き歌が多く、わしは好ましく思うておる。さりとして、すべて載せるわけにもいかぬ。他の東国の歌すべてに目を通してからでないと、それは言えぬ」

「ならば、私ども、上総国、下総国、下野国の良き歌を、是非その尊き歌集にお載せくださいませ」

と、上総国の部領使が、家持の顔を窺いながら、何やら尋ねます。

「ところで、兵部少輔どの、つかぬことをお尋ねさせていただきとうございますが……」

「つかぬこと？何じゃ」

「防人の歌を集める訳はよく分かりましたが、なにゆえに……」

「やめろ、やめろ……やめろて！」

「構わぬ、申してみよ」

「はい、なにゆえに、筑紫を守るために、遠路はるばる東国の民を呼び寄せるのでございますか？」

「はい、ならば、私もお尋ね申します。九州の国々にも若き男^{をのこ}がたくさんおるといのに、なにゆえ、わざわざ東国から出向かねばならないのでございますか？」

「九州の男ではなく、わざわざ東国から？……お主らが申す通りじゃ……実は、わしも同じことを考えておる」

「真にございますか？兵部少輔どのも、同じことを考えておられると申されるのですか？」



(大伴家持) 和泉元彌さん

「そうじゃ、今は申せぬが……そのために……そのためにも、防人たちの歌を集めておるのじゃ」

「そのために、われら防人の歌を……？」

そして、「歌は 1 首も持ってきてない」と言った上総国の部領使は、隠し持っていた 19 首の歌の中から、「女々しい」歌、2 首を取り出し、おずおずと読み上げました。

「それでは、兵部少輔どの、このような歌はいかがでございましょう？」

「我が母の 袖もち撫でて 我がからに

泣きし心を 忘れぬかも」



(部領使) 戸谷昌弘さんと加藤記生さん

(私の母がこの袖をつかんで撫でながら、私のために泣いた心が忘れられないよ)

かみつよほろものべのおとら
上総國山邊郡上丁物部乎刀良 (巻 20・4356)

「女々しくて、防人の歌らしくないので駄目にございますか？ できの悪い歌で外されるのでしょうか？」

「とんでもない！ 歌を聞いただけで、母の子への思いが伝わってきて、私まで涙しそうじゃ。このように偽りない心情を詠んだ歌を外す訳がなからう」

「兵部少輔どの、防人の父の歌もございますが……このような歌はいかがなものでしょうか？」

「家にして 恋ひつつあらずは な は 女が佩ける 大刀になりても いは 斎ひてしかも

(家に残って案じているよりも、おまえの腰に帯びる太刀になって、おまえをいつも見守りたいものだ)

くのみやつこのちやうくさかへのおみみなかのち
上総國國造 丁 日下部使主三中父 (巻 20・4347)

「ああ、良き歌じゃ。宮廷の歌人にも同じような歌はあったが、防人の父の切ない思いが伝わり、この歌の方が優れておる」

こうして防人たちの歌は国ごとにまとめて集められ、最終的には、東国 12 カ国の内、安房と甲斐の国を除いた 10 カ国から、166 首の歌が献上されてきました。その歌のほとんどは技術的には拙劣で、歌の表現も拙いものも多くありましたが、そこから浮かび上がってくる防人たちの生の声は私家持の心を打ち強い感動を覚えたのです。「醜の御楯」の歌のような、大君を詠った歌は、ほんの数首だけで、ほとんどは、防人たちが、その父や母、妻や子、恋人たちと別れを悲しみ、その身の上を案ずる農民たちの痛切な思いがひしひしと伝わってくる歌ばかりでした。ねらい通りでした。きっとこれらの歌は役に立つぞ。確かに、私の求めていた「まこと 真の歌」が、そこにはあったのです。「拙き歌はとり載せず」と申したように、私はその中から、私の裁量で 84 首を選んで「万世に語り継ぐ歌集」に残したのです。

その中で、父母や妻子を偲び、望郷の思いを素朴な東国方言で詠んだ歌などは、とりわけ見事です。

「父母が^{かしら}頭かき撫で^さ幸くあれて^{けとぼ}言ひし言葉ぜ^せ忘れかねつる」

(父と母とが、私の頭を撫でまわし「くれぐれも無事でお帰り」と言った言葉が忘れられない)

駿河国丈部^{はせつかへのいなまろ}稲麻呂 (巻 20・4346)

「我が妻も 画に描き取らむ 暇もが 旅行く我は 見つつ偲はむ」

(わが妻を絵に描き写す時間がほしい。そうすれば旅に行く俺は妻の絵をながめて、なつかしさにふけることができるのに)

遠江国長下郡物部古麻呂 (巻 20・4327)

昔年の防人の歌を抜き書きして持ってきた、次のような歌もありました。

「防人に 行くは誰が背と 問ふ人を 見るがともしさ 物思ひもせず」

(「今年防人に行くのは誰のだんななのかしら」と、尋ねる人を見るとうらやましい。なんの気苦勞もしないで)

作者未詳 (巻 20・4425)

万葉ファンタジア「防人の歌」はこれまでですが、家持自身も、これらの防人の歌に心を揺すぶられて、「追ひて防人の別を悲しがる心を痛みて作る歌」(巻 20・4331～33) や「防人の情^{こころ}と為^なりて思^のを陳べて作る歌」(巻 20・4398～4400)、そして「防人の別を悲しがる情を陳べたる歌」(巻 20・4408～12) など、長歌 4 首と短歌 13 首を作って、防人たちの歌と一緒に「万世に語り継ぐ歌集」に残しています。

家持は、これら合わせて 17 首の歌を、東国 10 か国から集まった防人の歌を読み終わった、天平勝宝 7 歳の 2 月 8 日から 23 日までのわずか 15 日間の間に作り上げていますが、いかにこれら防人の歌が、家持の心を揺り動かしたのか分かる思いがいたします。

冒頭に掲げた 1 首が、長歌「防人の別を悲しがる情を陳べたる歌」(巻 20・4408) です。

そして、この長歌の反歌も 1 首、上げておきましょう。

「家人の^{いは}斎へにかあらむ^{たひら}平けく 舟出はしぬと 親に申さね」

(家人が慎んでくれたからか、平安に船出しましたと、親に申し上げてくれ)

大伴家持 (巻 20・4409)

家持が「東国の歌を好ましく思ったから、防人の歌を集めた」だけではない、「今は申せぬ」、そのわけとは……？

そして、家持は、なにゆえに、あれほどに短い間に、身を入れ思いを込めて、17 首もの防人たちの悲別の歌を詠み上げたのか……？

それは、いずれ改めて、もう 1 つのファンタジアとしてお伝えすることとしよう。

